

4-1-5 第一専門診療部

4-1-5-1 消化器科

1. 概要

診療体制は医長、医員、レジデントの各1名、計3名と変わらず、他科に比し恵まれない環境で、入院患者12-13名、外来患者月平均350名程度で一応目標患者数に達する数をこなし、忙しい日々であったが、大きな事故もなく順調に推移した。炎症性腸疾患の診察では内視鏡科の林篤先生の応援を得て、白血球除去療法などの治療方法を併用し、好成績を残した。肝、消化管疾患は閉塞性肝疾患中心として、診断治療を行った。基礎的臨床研究については肝の繊維化についての検討とHCMV感染の閉塞性肝障害に対する効果についての研究を免疫学的側面から継続した。

2. 診療活動

2.1 肝胆道疾患およびその周辺の免疫病に関する疾患の診断と治療

肝臓病疾患は胆道閉鎖症、アラジール症候群、その他に胆汁うっ滞性疾患、シトリン欠損症を始めとする代謝性肝疾患、ルポイド肝炎など幅広く扱っている。肝胆道疾患は胆道閉鎖症、アラジール症候群などの患者数が多く、成人例についても診断、治療をおこなっている。これらの疾患の長期予後はその線維化の機序については、基礎的研究を含め、研究を深めて臨床に役立てたいと考えている。劇症肝炎は2名を紹介され、血漿交換をしながら、移植により救命した。

また、ウィルソン氏病に関しては、酢酸亜鉛の効果について検討し、ペニシラミンやトリエンに勝るとも劣らない効果が認められ、腸管からの吸収抑制であるため、貧血などの副作用が認められる反面、食事を比較的自由にすることが出来、成長期の子供には有益と考えられる結果を得た。

2.2 消化管疾患は難治性下痢症と炎症性腸疾患（潰瘍性大腸炎、クローン病）を主体としてその診断と治療をおこなってきた。炎症性腸疾患は年間5-10名程度の増加で、新生児乳児期の難治性下痢症に伴うもの、免疫不全症に伴うものなどの例を経験した。白血球除去療法、抗炎症性サイトカイン療法、免疫調整療法などの治療をおこない、ステロイド無しの治療法について検討した。炎症性腸疾患と難治性下痢症、アレルギーと下痢症との関連などについて検討している。

近年問題となっている心と消化器疾患について検討し、食事の精神に及ぼす影響について症例を通じて明らかにしてきた。神経性食指不振症、過敏性腸症候群などの精神的影響のつよい疾患はもとより嘔吐症や便秘症、発達障害を含め、広く家族全体のあり方まで含めて、こころの診療部との協力をもとに治療方法を検討している。

2.3 B型肝炎、C型肝炎に対してはインターフェロン、ラミブジンなどの治療を行い、小児に対しても有効であることを確認できた。C型肝炎についてはリバビリンの併用療法、PEGインターフェロンの効果について、検討を進めている。小児では単独療法は成人に比し著効率が高いが、インターフェロン使用後の再燃例に対して、リバビリンの併用療法は十分な効果が認められず、PEGインターフェロンの長期投与の方が最終的には良好な結果が得られた。精神障害や易疲労感などの副作用を考慮すると、長期投与インターフェロン療法が問題ないかどうかは、今後の検討課題である。

2.4 代謝性の肝障害を示す患者も増加傾向にあり、その生活の質を高めるための治療法の検討を行っている。シトリン欠損症やOTC cycle 異常症については栄養療法、アミノ酸製剤の併用により、経過観察中である。糖原病では1型、8型の患者について、肝庇護の点から血糖維持のための栄養療法、アミノ酸製剤の併用療法を行ない、良好にコントロールされている。Wilson病では、硫

酸亜鉛、酢酸亜鉛などの治療方法をおこない、良好な臨床結果を得ている。

2.5 腎不全末期の患者については、主としてCAPD療法を施行し、NPDなどにより生活の質に注意を払いながら、透析生活への移行をはかり、同時にその腸管膜での糖代謝および糖分解産物の膜にあたる影響について検討している。これまでの検討により、3DGをはじめとする糖分解産物が蛋白凝集の作用を介して腹膜硬化の原因となっていることを明らかにしてきた。今回、中性透析液が発売され、その腹膜硬化症発症防止効果のあることが報告されているが、この使用による、蛋白および中皮細胞への結果について検討を行っている。CAPD療法の位置付けも見直され、腎機能保持作用の面から早期導入の効果が期待され、腎不全前期の利尿期間や腎機能の維持に有効で、無尿への移行を遅らせるとの報告があり、腎の疾患によっては小児にとって、栄養、骨代謝の点から望ましいと考えられる。腎不全の多尿期にある患者についてはイコデキストリンの透析方法のCAPD療法をおこなうことによって患者の生活の質の向上をはかるとともに、生理的変化について臨床的な検討をおこなっている。

2.6 在宅栄養療法

経腸栄養、在宅中心静脈栄養についても積極的に取り組み、成長、発育に及ぼす影響、セレンなどの微量元素の補充療法について検討してきた。

以上、活動は多岐にわたっているが、患者さんの必要に応じて医療を広げるというスタンスでおこなってきた。